

平成10年度

年報

HOKKAIDO MUSEUM OF LITERATURE
北海道立文学館・(財)北海道文学館

目次

■文学館の歩み	1
■北海道立文学館の設立経緯	2
■目的及び事業	3
■平成10年度事業概要	4
I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業	4
II 展覧会・文芸講演会等の開催事業	4
1 展覧会 (1) 常設展	4
(2) 特別企画展等	7
2 文芸講演会・講座等	10
III 文学に関する調査研究事業	11
IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業	12
V 啓発広報事業	12
VI 刊行物の刊行事業	13
VII 北海道立文学館の管理運営受託事業	13
VIII その他の付帯事業	13
■統計・資料	
展覧会別観覧状況 閲覧室利用状況 総括表	14
資料収集状況 主な購入特別資料一覧	15
企画展出品資料一覧	17
■組織及び役職員	
組織機構図 役員等一覧	19
専門委員会構成一覧 職員名簿	20
■諸会議・運営日誌	21
＜付録＞北海道立文学館利用規則	23

■ 文学館の歩み ■

年 次	事 項	年 次	事 項
昭和42	北海道文学館設立総会、館報1号発行、有島武郎文学展	62	『北海道文学百景』『北海道文学絵はがき』発行、北海道文学館歩み展、北海道文学館20周年記念祝賀会および記念展、俳句誌「氷原帯」創刊40周年記念展
43	文学に見る北方風物展	63	北海道歌人会創立35周年記念展、北海道新聞文学賞展、『北海道文学読本』発行、没後30年久保栄文学展、近代日本の文豪一森鷗外展、財団法人北海道文学館設立
44	北海道旅の文学展	平成元	胆振文学展・目で見える風土と文学、俳句誌「葦牙」創刊700号記念展、北海道女流作家第一号森田たま展、北海道川柳展、作家生活25年記念三浦綾子展（札幌、旭川）
45	伊藤整・亀井勝一郎文学展	2	児童文学「新十津川物語」展（札幌、新十津川）、移動展・石川啄木と野口雨情展、文化情報誌「ニュースきょうどう・カムイミントラ」展、歌誌「新墾」創刊60周年記念展、北のロマンを奏でる一渡辺淳一文学展、市町村文芸誌展一道東・道北編
46	北海道詩歌展	3	市町村文芸誌展一道央・道南編、移動展・石森延男と室蘭の児童文学展、文学展・北海道花の歳時記、来道60年記念斎藤茂吉展、文芸誌「赤煉瓦」とその周辺展
47	目で見える札幌文学散歩	4	設立25周年記念・有島武郎と木田金次郎展、北電文化誌「フロンティア」著名作家原稿展、文学展・北海道花の歳時記（室蘭）、北の文学風物誌展（冬の巻）、らいらっく文学賞展
48	藤村における旅資料展、久保栄文学展、札幌の文学・百年展	5	俳句誌「アカシヤ」500号記念展、札幌文学散歩展、没後25年・道立文学館着工記念伊藤整文学展、北海道詩人協会40周年記念展
49	文学にみる札幌風物展、北海道女流文学展、小田観螢・人と作品展	6	文学・北の歳時記展、文学展・札幌線沿線の旅、北の山と文学展、和田謹吾理事長死去
50	札幌の作家展（戦前の巻）、戦後30年・北海道文学展、札幌の作家展（戦後の巻）、川柳に見る戦後の札幌展	7	澤田誠一理事長就任、北海道立文学館開館記念特別展・北の夜明け、所蔵品展・私の愛した抒情詩人たち
51	碑にみる北の文学展、林不忘・長谷川四郎兄弟展、石狩川流域文学展、歌人・山下秀之助展	8	特別企画展・北海道の俳句、特別企画展・久保栄と北海道、所蔵品展・船山馨の文学世界
52	札幌の文学サークル展、文学展・北の海、札幌・戦後演劇展	9	特別企画展・北海道の短歌、特別企画展・有島武郎とヨーロッパ、企画展・吉田一穂とその時代
53	文学展・ふるさとの窓、北海道児童文学展、さっぽろの俳句展		
54	札幌市資料館に館看板掲示、現代北海道短歌展、風土のなかの文学碑展、『北海道文学地図』発行		
55	現代北海道俳句展、北海道岬文学展、児童文学と絵日記展—石森延男・その周辺—		
56	雑誌「北方文芸」展、石森延男児童文学展、館所蔵文芸雑誌閲覧開始、北海道岬・文学展、高橋留治氏から3000余冊の詩書等寄贈、北海道文学全集展		
57	島木健作文学展、船山馨文学展、北海道・湖文学展、鮫島交魚子・加藤愛夫文学展		
58	寺田京子・宮田益子・森みつ三人展、文学展・大地と人間、にんげん坂本直行展—その絵と文学—		
59	北海道児童文学全集展、北海道演劇資料展		
60	北海道文学展示室が常設展に移行、北海道俳句展、北原白秋展、文学にみる北方風物展、更科源蔵理事長死去、『北海道文学大事典』発行、地域文化功労者賞受賞		
昭和61	日本の文学館風景展、和田謹吾理事長就任、歌誌「原始林」40周年記念展、「石川啄木と野口雨情」文学風物展、石森延男と札幌の児童文学展、詩誌「核」30周年記念展		

■ 北海道立文学館の設立経緯 ■

- 昭和62年 9月 北海道立文学館（以下、文学館と略）期成会が設立される。
- 昭和63年11月 財団法人北海道文学館設立が認可される。
- 平成 2年 3月 文学館設置調査費が議決される。
- 平成 2年 8月 文学館設置検討委員会が設置される。
- 平成 3年 3月 文学館設置検討委員会報告書が作成される。
- 平成 3年10月 文学館基本構想が策定される。
- 平成 4年 2月 札幌市中央区中島公園内道有地が建設予定地に決定する。
- 平成 4年 4月 構想設計コンペ審査委員会が開催される。
- 平成 4年11月 基本設計がまとまる。
- 平成 5年 1月 実施設計がまとまる。
- 平成 5年 7月 建設工事に着工。
- 平成 6年12月 建設工事が完成。
- 平成 7年 1月 4日 北海道立博物館条例の一部を改正する条例が施行される。
北海道立文学館利用規則が施行される。
- 平成 7年 4月 1日 財団法人北海道文学館が北海道教育委員会より文学館の管理運営を委託される。平成 7年度委託契約書締結。
- 平成 7年 9月22日 開館記念式典が挙行される。
- 平成 7年 9月23日 一般公開される。

■ 目的及び事業 ■

北海道立博物館条例（抄）

第1条 北海道における教育、学術及び文化の振興を図るため、北海道立博物館（以下「博物館」という。）を設置する。

第2条 博物館の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
北海道立北方民族博物館	網走市
北海道立文学館	札幌市

第5条 教育委員会は、公共団体又は公共的団体に対し、博物館の管理を委託することができる。

財団法人北海道文学館寄附行為（抄）

（昭和63年11月1日 北海道教育委員会許可
平成7年2月2日 北海道教育委員会一部変更認可
平成7年4月7日 北海道教育委員会一部変更認可）

（目的）

第3条 この法人は、北海道にゆかりのある文学資料を収集保存し、広く道民の利用に供するとともに北海道の風土に根ざした文学の振興に必要な事業を行い、もって北海道の文化の創造と発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、北海道の区域内において次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 北海道にゆかりのある文学資料を収集、整理、保存し、及び道民の利用に供すること。
- (2) 文学に関する展覧会、文芸講演会、文芸講座等を開催すること。
- (3) 文学に関する調査研究を行うこと。
- (4) 文学愛好団体等の活動に対し支援すること。
- (5) 道民の文学に対する関心を高めるため啓発広報活動を行うこと。
- (6) 文学に関する各種刊行物を編集及び刊行すること。
- (7) 北海道教育委員会の委託を受けて、北海道立文学館の管理運営を行うこと。
- (8) 前各号に掲げる事業に附帯する事業。

北海道立文学館利用規則（抄）

（北海道教育委員会規則平成7年1月4日施行）

（文学館の目的）

第1条の2 北海道立文学館（以下「文学館」という。）は、文学に関する書籍、原稿、書簡、文献、写真その他の資料及び文学者の遺品等（以下「文学資料」という。）を収集し、保存し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする。

（文学館の事業）

- 第1条の3 文学館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。
- 1 文学資料を収集し、保管し、及び展示すること。
 - 2 文学館が収集した文学資料を閲覧に供すること。
 - 3 文学に関する展覧会、講演会、講座、映画鑑賞会その他の催し（以下「文学に関する催し」という。）を開催し、及び他の行うそれらの催しに協力すること。
 - 4 一般公衆に対して、文学資料の利用に関し、必要な説明、助言等を行うこと。
 - 5 特別展示室又は講堂（以下「特別展示室等」という。）を文学に関する催しの利用に供すること。
 - 6 文学及び文学資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。
 - 7 文学資料の保管、展示等に関する技術的研究を行うこと。
 - 8 文学に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書を作成し、及び配布すること。
 - 9 他の文学館、図書館、美術館、博物館、研究機関等と緊密に連携し、及び協力し、刊行物及び情報の交換、文学資料の相互貸借等を行うこと。
 - 10 地域における学校、図書館、公民館等の教育又は文化に関する諸施設が行う文学に関する活動を援助すること。
 - 11 その他文学館の目的を達成するために必要な事業

■ 平成10年度事業概要 ■

I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業

寄附行為第4条第1号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 寄贈資料受入れ総数（図書・雑誌及び特別資料）3,918点
- 購入図書・雑誌 1,114点
- その他の購入特別資料 129点
- レプリカ作成・VTR、テープ、CD 8点

（別掲の統計・資料編資料編「資料収集状況」欄参照）

整理・保存 カード作成及び収蔵資料のコンピュータ入力並びに収蔵資料の寄贈・寄託目録作成等
閲 覧 利用者 延べ2,663人

II 文学に関する展覧会・文芸講演会等の開催事業

寄附行為第4条第2号に掲げる事業は、次のとおり行った。

1 展覧会事業

(1) 常設展「北海道文学の流れ」

会 期 通 年
会 場 北海道立文学館常設展示室
入場者 9,285人

展示の構成・内容は開館当時のものを踏襲しているが、4月に「北海道の詩」コーナーの展示替えを実施した。新しいコーナーでは、これまで壁面に登場していた明治後期の来道詩人たちを解説文中でふれることとし、北海道出身詩人の活動を中心に、解説、写真、直筆原稿、作品抜粋の他道内の詩誌分布状況（地図）や受賞歴などを壁面に提示した。また、展示ケースには詩人たちの代表的詩集や詩誌などを収めて紹介した。

以下に、展示編成の基本を掲げておく。なお、〔 〕内は監修者名を示す。

〈札幌農学校と有島武郎〉〔高山亮二〕

このコーナーでは、ウィリアム・S・クラークの事蹟によって広く知られている札幌農学校（現、北海道大学。明治9年開校）の存在と活動を紹介するとともに、その農学校に学び、のちに母校の教壇に立って多くの後進を育成し、文学者・思想家として日本近代史に刻まれる仕事を残した有島武郎について、内村鑑三、新渡戸稲造、森本厚吉、ティルダ・ヘックらとの交流を含め、通算12年間にわたる本道在任期の足跡を概観した。

〈北海道文学の流れ—明治・大正期〉〔木原直彦〕

このコーナーで取り上げた主な文学者・関連人物名、事項名は次のとおりである（以下同）。

* 「空知川の岸边」国木田独歩

国木田独歩、佐々城信子

* 開拓期を彩る作家群

岩野泡鳴、幸田露伴、長田幹彦、島崎藤村、葛西善蔵、徳富蘆花ほか

* 漂泊の人・石川啄木

石川啄木、石川節子、橘智恵子、野口雨情ほか

* 有島武郎をめぐる人々

有島武郎、有島生馬、里見弴、武者小路実篤、志賀直哉

* 道産子作家誕生

武林無想庵、岡田三郎、森田たま、中戸川吉二、中村武羅夫、子母沢寛、素木しづ、長谷川海太郎

* 同人雑誌群

「路上」「路傍人」「君影草」「白夜」「歩み」ほか

* 来道作家の足跡（大正期）

文学地図（足跡図）一吉屋信子、宮本百合子、橘外男、宮沢賢治、宇野千代、長田幹彦、久米正雄ほか

〈北海道文学の流れ—昭和前期〉〔西村信〕

* プロレタリア文学の潮流

葉山嘉樹、小林多喜二、久保栄、小熊秀雄、島木健作、本庄陸男ほか

* 若い詩人の肖像

伊藤整、川崎昇ほか

* 来道作家の足跡（昭和前期）

芥川龍之介、里見弴、鶴田知也ほか

* 農民文学の世界

吉田十四雄、辻村もと子、板東三百、早川三代治、坂本直行ほか

* 戦時下の文学

林容一郎、中津川俊六、八木義徳、寒川光太郎ほか

〈北海道文学の流れ—昭和後期〉〔神谷忠孝〕

* 戦後文学の展開

風巻景次郎、武田泰淳、宇野親美、中沢茂、澤田誠一、木野工ほか

* ささまざまな座標Ⅰ

船山馨、亀井勝一郎、八木義徳、和田芳恵、長谷川四郎、李恢成、重兼芳子、高橋揆一郎、小檜山博ほか

* 旋風をおこした作家たち

原田康子、三浦綾子、渡辺淳一

* ささまざまな座標Ⅱ

荒巻義雄、藤堂志津子、佐藤泰志、川又千秋、佐々木譲、土居良一ほか

* 来道作家の足跡（昭和後期）

福永武彦、戸川幸夫、新田次郎、水上勉、開高健、大江健三郎ほか

* 活躍する作家たち

三浦清広、加藤幸子、沖藤典子、久間十義、見延典子、辻仁成、谷村志穂

〈北海道の詩〉〔永井浩〕

* 草創期

児玉花外、高村光太郎、三木露風、宮沢賢治、北原白秋

* 生成期

更科源蔵、吉田一穂、左川ちか、猪狩満直、鈴木政輝、加藤愛夫、和田徹三ほか

* 戦争と詩

百田宗治、今井鴻象、鷺巣繁男、三谷木の実、牧章造ほか

〈北海道の短歌〉〔田村哲三〕

* 北海道歌壇の動き

山下秀之助、酒井広治、小田観螢、中城ふみ子ほか

* 来道歌人

斎藤茂吉、与謝野寛、与謝野晶子、斎藤史、宮柊二ほか

* 口語短歌

鳴海要吉、石川啄木ほか

* アイヌの歌人

バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市ほか

〈北海道の俳句〉〔木村敏男〕

* 北方俳句の夜明け

松窓乙二、河東碧梧桐、牛島藤六、高浜虚子、長谷川零餘子、臼田亜浪、石田雨圃子、青木郭公ほか

* 俳句近代化への潮流

荻原井泉水、泉天郎、長谷部虎杖子、唐笠何蝶、細谷源二、土岐鍊太郎、伊藤凍魚、水野波陣洞ほか

* 花ひらく北の俳句

斎藤玄、寺田京子、比良暮雪、佐々木丁冬ほか

* 俳句の現代

比良暮雪、佐々木丁冬、鮫島交魚子、園田夢蒼花、山岸巨狼ほか

〈アイヌの口承文芸〉〔藤本英夫〕

金田一京助、知里真志保、久保寺逸彦、金成マツ、知里幸恵、萱野茂

〈北海道の川柳〉〔斎藤大雄〕

* 明治～昭和前期

鈴木青柳、北村白眼子、亀井花童子、神尾三休、三輪破魔杖、井上剣花坊、鶴彬、西嶋〇丸、

田中五呂八ほか

* 昭和後期～平成7年

西村欣童、高木夢二郎、森田一二、甲野狂水、古田八白子

* 北海道の川柳社

道央、道南、道東、道北の各結社の活動と結社誌等を紹介。

〈北海道の児童文学〉〔柴村紀代〕

* 明治～昭和20年代

伊東音次郎、支部沈黙、坪松一郎ほか

* 昭和30年代

石森延男、神沢利子、安藤美紀夫、渡辺ひろし、玉川雄介ほか

* 昭和40年代以降

加藤多一、後藤竜二、長野京子ほか

〈千島・樺太の文学〉〔木原直彦〕

夏堀正元、吉村昭、李恢成、寒川光太郎ほか

(2) 特別企画展

● 「北海道の短歌」

会 期 平成10年4月25日(土)～5月31日(日) (33日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 1,034人

特別企画展「北海道の短歌」は、全体を大正・昭和期の「主な来道歌人」、戦前・戦中の「北海道歌壇の形成」、戦後の「北海道歌人会結成とその後の展開」、現代の「北海道歌壇の流れ」の4つのコーナーに分け、さらに北海道歌壇史年表も含めて明治・大正期から現代にいたる北海道の歌壇の流れを一望できるように展示、紹介した。各コーナーにはそれぞれの時代の短歌結社誌や合同歌集、個人歌集、自筆歌稿、短冊、色紙等を精選して展示し、本道歌壇の豊かな流れと、歌人たちの残したすぐれた成果を紹介した。



主な資料としては小田観螢や山下秀之助の自筆原稿、中城ふみ子の創作手帳、若山牧水や並木凡平の短冊などの特別資料のほか、伊東音次郎や北見恂吉、酒井廣治、土屋文明、齋藤茂吉などの著書、および主だった北海道短歌誌などを出品した。

● 「有島武郎とヨーロッパティルダ、まだ僕のことを覚えていますかー」

会 期 平成10年8月8日(土)～10月11日(日) (56日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 2,860人

有島生誕120周年事業として取り組まれた本特別企画展は、日露戦争が終息した直後という時代背景のもと、札幌農学校を卒業し兵役を終えた若き日の有島武郎が、アメリカでの3年間の研修生活からの帰途に立ち寄ったスイスでのティルダ・ヘックとの生涯に渡る交流を主題として開催した。また開催にあたっては、スイス・シャフハウゼン市及び、有島武郎からティルダ・ヘックに宛てた書簡類を保管している同市図書館、ティルダ・ヘック自身を物語る資料を保管している同市博物館などからの全面的な協力を得た。



展示資料には、スイスから借用した書簡類、絵画、書籍、宿泊名簿兼雑記帳のほか日本国内にある有島のヨーロッパ体験に関する資料もあり、有島ファンや研究者ばかりでなく多くの方々の好評を得た。

有島生誕120周年事業は、文化庁、外務省、国際交流基金の後援を受けて、本特別企画展を皮切りとしてフォーラム、講演会、音楽と朗読の会など多くを実施した。

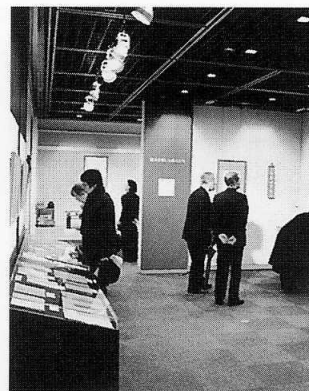
●企画展「吉田一穂とその時代－現代詩の極北をめざす－」

会 期 平成11年2月6日(土)～3月20日(土) (36日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 907人

本企画展は、日本の近代文学史において独自の詩的世界を確立し、詩史に不動の業績を刻んだ吉田一穂の全体像を浮き彫りにすることを目的に構成した。併せて一穂の絵本童話の世界をはじめ、編集者としての活躍、交流のあった北原白秋や金子光晴ら同時代の詩人・作家などにかかわる資料も展示し、一穂の多面的な活動も紹介した。特に貴重な展示品としては、アメリカ・メリーランド大学プランゲ文庫提供のGHQ（連合軍総司令部）による検閲跡のある一穂の絵本や子ども向けニュース誌などがあり、これらは谷暎子北星学園女子短期大学教授のプランゲ文庫での調査・研究がもとで展示できることとなった。

また一穂が没した後、枕元から発見された『桃花村』の草稿ノートや自らの戒名「白林虚籟（居士）」を記した墨書なども展示した。

展示室内では、遺品として一穂の長男・吉田八峯氏が保存していたパイプ、メガネ、棗、机、手帳などをお借りして一穂の書斎を復元し、好評を得ることができた。



(3) ファミリー文学館（「たんけん文学館」を改称）

●夏休みファミリー文学館「エッチングでさし絵づくり」（講習会）

期 間 平成10年7月25日(土)～7月30日(木) (5日間)
講 師 大井戸百合子（銅版画家）
参加者 80人

ファミリー文学館では、札幌市在住の銅版画家大井戸百合子氏を講師に迎え、小学校高学年と中学生を対象にエッチング（銅板を使用した腐食版画制作技術）に取り組んだ。銅板に絵を刻んだ後に酸化第二鉄溶液に漬ける「腐食」という工程が参加者の興味を引き、また、最終日には各自が自分の作品に一文を寄せた。また、それぞれの作品は、作品展「わたしの銅版画作品！」の中で展示された。



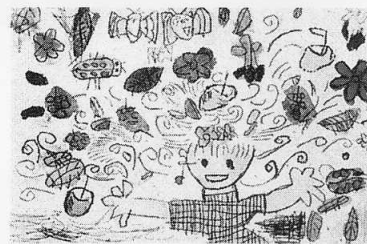
〈付帯事業〉

●作品展「わたしの銅版画さくひん！」

期 日 平成11年1月9日(土)～17日(日) (7日間)
講 師 北海道立文学館講堂
参加者 465人

●作品解説とワークショップ「絵本を読む・絵本を描く」

日 時 平成11年1月9日(土)、10日(日)
講 師 北海道立文学館特別展示室及び講堂



参加者 26人

※以上の3事業は、札幌市教育委員会後援

(4) ※「母と子の文学のつどいー大井戸百合子・銅版画による絵本原画とさし絵展ー」

会 期 平成11年1月9日(土)～17日(日) (7日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

後 援 札幌市教育委員会、財団法人道銀文化財団

※冬休みファミリー文学館と併催

母と子の文学のつどいでは、札幌を拠点に活躍中の銅版画家・大井戸百合子氏の原画・さし絵展を開催した。展示会では、画文とも大井戸氏の手になる絵本「ふゆのいちばへおかいもの」の原画をはじめ、「ぼくとアルベスにいちゃん」「チロをさがして」のさし絵原画、代表作である市場シリーズ、新聞等に使用された小品、マレーシアに素材を求めた近作など150点を展示し、大井戸ファンをはじめたくさんの熱心な観覧者を迎えることができた。



2 講演会・講座等事業（会場は、特記したもの以外はいずれも北海道立文学館講堂、午後2時から）

(1)文芸講演会

●演 題 「アララギの歌人たちと北海道」

講 師 宮地 伸一（歌人）

日 時 平成10年5月23日(土)

聴講者 184人

●演 題 「スイスにおける日本文化の受容史」

講 師 ルネ・シュベヒト（スイス・シャフハウゼン市立図書館長）

日 時 平成10年8月8日(土)

聴講者 38人



スイス・シャフハウゼン市立図書館長であるルネ・シュベヒト氏を迎えて行われた本講演会では、氏によりシャフハウゼンで1900年代初頭に活躍していた芸術家らの集まり「フジヤマ・サークル」の構成メンバーや有島武郎・生馬兄弟との関係についての調査結果が紹介され、多くの出席者に感銘を与えた。

●演 題 「有島武郎とわたし」

講 師 永畑 道子（作家・熊本近代文学館長）

日 時 平成10年9月12日(土)

聴講者 87人



(2) 文芸セミナー

●演 題 「俳句で考えたこと」

講 師 辻協 系一（俳句作家）

- 日 時 平成10年7月4日(土)
 聴講者 62人
- 演 題 「有島武郎と札幌の家」
 講 師 前川公美夫 (有島武郎研究家)
 日 時 平成10年8月22日(土)
 聴講者 69人
- 演 題 「風土に育つ文学」
 講 師 鳥居 省三 (釧路短期大学教授)
 日 時 平成10年10月24日(土)
 聴講者 21人
- 演 題 「吉田一穂の遺したもの」
 講 師 平原 一良 (当館事業課長)
 日 時 平成11年3月13日(土)
 聴講者 45人

(3) 独自企画講演会等

※有島武郎生誕100年記念事業関連講座・シンポジウム等

以下、共催関係はカッコ内に記すとおり。北海道立文学館 (全事業)、札幌市 (文学館フォーラム)、星座の会 (講座)、財団法人札幌芸術の森 (シンポジウム)。

また、後援は、国際交流基金、北海道新聞社、NHK札幌放送局、有島記念館、協賛は、財団法人北海道公立学校教職員互助会、財団法人北海道教職員厚生会から得た。

平成10年8月9日(日) シンポジウム「有島武郎とスイス」

R・シュベヒト (スイス・シャフハウゼン市立図書館長)

神谷 忠孝 (北海道大学教授)

ハイコ・ナログ (北海道大学助教授)

高山 亮二 (星座の会会長)

平原 一良 (当館事業課長)

聴講者 61人

(会場は札幌芸術の森センター内レクチャールーム)

平成10年8月23日(日) 作品鑑賞のつどい第1回「『星座』を読む」

藪 禎子 (近代文学研究者)

聴講者 45人

平成10年9月5日(土) 講座第1回

「有島武郎のアメリカ」

栗田 廣美 (白梅学園短期大学教授)

聴講者 55人

栗田廣美白梅学園短期大学教授により持たれた本講座は、有島武郎の思想形成に果たしたアメリカ留学の意義を中心に展開された。アメリカ近代文明の重圧や留学時期と重なった日露戦争の影響により従来の思想的基盤を



喪失した有島武郎が、金子喜一やアメリカ社会主義左派との交流の中で国家否定・革命肯定へとその心情を変化させていく流れを検証する講義は、有島研究の新しい領域を示した。

平成10年9月11日(金) 音楽と朗読の夕べ「有島武郎が聴いたティルダの歌声」

声楽：浅里いづみ ピアノ：浅井智子 他

参加者 79人

有島武郎がシャフハウゼンで聞いたティルダの歌声を再現するべく行われた「音楽と朗読の夕べ」では、「小さきものへ」の朗読に続いてスイス古謡、ブラームス歌曲、モーツァルト、シューベルトの小品などが演奏され、参加者それぞれが有島武郎とティルダ・ヘックに思いを馳せながら、夕べのひとつときを過ごした。

平成10年9月26日(土) 講座第2回「新渡戸稲造・内村鑑三と有島武郎」

高山 亮二(星座の会会長)

聴講者 95人

平成10年9月27日(日) 作品鑑賞のつどい第2回『『カインの末裔』を読む』

工藤 正広(北海道大学教授)

聴講者 66人

(以上、会場は共に北海道立文学館講堂)

平成10年10月3日(土) 文学館フォーラム「有島文学の現代性」

神谷 忠孝(北海道大学教授)

井上 理恵(吉備国際大学助教授)

中山 昭彦(北海道大学助教授)

山田 俊治(横浜市立大学助教授)

聴講者 96人

(会場は札幌時計台講堂)

※吉田一穂生誕100年記念事業関連特別講演会

平成11年2月6日(土) 「白鳥古丹と吉田一穂」

講師 添田 邦裕(詩人)

聴講者 54人(会場は北海道立文学館講堂)

(4) 映像鑑賞のつどい

●文学映画鑑賞会

期 日 平成10年6月21日(日)「氷点」

入場者 56人

28日(日)「幻の光」

入場者 15人

11月7日(土)「華の乱」

入場者 50人

会 場 北海道立文学館講堂及び特別展示室

入場者 延べ199人

●フィルムレクチャー「映画創生期とアヴァンギャルド映画」

期 日 平成10年11月14日(土)
会 場 北海道立文学館講堂
講 師 中島 洋 (シアターキノ代表)
入場者 78人

III 北海道文学に関する調査研究事業

寄附行為第4条第3号に掲げる事業は、次のとおり行った。

有島武郎及びティルダ・ヘックに係る書簡・絵画等資料の所在並びに保存実態調査をスイス・シャフハウゼン市において実施。

- 有島武郎関連資料調査 (国内)
- 吉田一穂資料調査
- 日本近代文学館等資料受入れ、整理実態調査
- 特別企画展・企画展の図録・リーフレット作成調査

IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業

寄附行為第4条第4号に掲げる事業は、次のとおり行った。

次の団体の事業に対して、名義後援の使用を承認して支援した。

- 現代俳句協会、中北海道現代俳句協会
『現代俳句の100冊』色紙・短冊展
(平成10年6月27日～7月5日 北海道立文学館特別展示室)
- 有島記念館
特別展「いま 見直す 有島武郎の軌跡」
(平成10年7月18日～11月7日 ニセコ町同館)
- 古平町、同教育委員会、古平町吉田一穂の会
「生誕百年 吉田一穂記念展」
(平成10年8月13日～20日 古平町文化会館)
- 縄文詩劇の会、創造集団ノール
「ポエムコンサートー詩と音楽と演劇のつどいー」
(平成10年8月15日 北海道立文学館講堂)
- 「ロルカの夕べ」実行委員会、ボッセの会ほか
「G・ロルカの夕べ」
(平成10年11月21日 北海道立文学館講堂)

V 啓発広報事業

寄附行為第4条第5号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 施設案内、常設展リーフレット、各展覧会ポスター・ちらし及び講演会・セミナーちらし等を制作・発行。
- 広報誌「サンクンガーデン」第6号(平成10年10月)、第7号(平成11年3月)の編集発行。
- ※「北海道文学館報」第48号(7月)、第49号(12月)の編集発行。

VI 刊行物の刊行事業

寄附行為第4条第6号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 特別企画展「北海道の短歌」図録（B5判、32頁）の刊行。
- 特別企画展「有島武郎とヨーロッパ」図録（A B判、48頁）の刊行。
- 所蔵品展「吉田一穂とその時代」リーフレット
- 吉田一穂生誕100年記念図書『北斗の印』
古平町、同教育委員会、記念事業実行委員会との共同企画・刊行。

VII 北海道立文学館の管理運営受託事業

寄附行為第4条第7号による道立文学館の管理運営は、北海道と当財団との間に交わされた委託契約（4月1日締結）に基づき、適切に行った。

VIII その他の付帯事業

※古書市'98文芸おたのしみバザール

平成10年9月12日(土)、13日(日) 文学館1階ロビーで実施。

ミニ古書市地階にて通年実施。ともにチャリティ・バザール実行委員会（田村哲三委員長）との共催。

- (注)
- 本項中、※印の事業は財団の独自企画のものを示す。
 - 文中、講師名等の敬称は省略した。

■ 統計・資料 ■

展覧会別観覧状況

区 分	常 設 展	特 別 企 画 展		所 蔵 品 展	計	ファミリー 文学館	母と子の 文学のつどい
	北海道文学の 流れ	北海道の短歌	有島武郎と ヨーロッパ	吉田一穂と その時代		エッチングで さし絵作り	大井戸百合子・銅版画に よる絵本原画とさし絵展
開催日数	294日	31日	56日	36日	294日	5日	9日
観覧者総数	9,285人	1,034人	2,860人	907人	14,086人	80人	491人
有 個 人	一 般	5,162	751	2,060	500	8,473	
	大学生	470	4	132	38	644	
	高校生	189	5	0	19	213	
	小中生	636	1	46	46	729	
	小 計	6,457	761	2,238	603	10,059	
団 体	一 般	550	10	91	0	651	
	大学生	144	0	74	0	218	
	高校生	44	0	0	0	44	
	小中生	43	0	0	0	43	
	小 計	781	10	165	0	956	
免 除	2,047	263	457	304	3,071		
合 計	9,285	1,034	2,860	907	14,086		

※ 小中高生は、常設展及び所蔵品展は無料。

閲覧室利用状況

区 分	人数・件数	1日平均
開 室 日 数	294日	
利 用 者 数	2,663人	9.1人
レファレンス件数	107件	0.4件
資料閲覧件数	132件	0.4件

事業種別来館状況（総括）

	区 分	利用者数
受 託 事 業	展覧会事業	14,086人
	閲覧事業	2,663
	講演会・セミナー事業	586
	文芸映画上映会事業	199
	その他の教育普及事業	569
財団独自事業		551
計		18,654

資料収集状況

区 分	購入点数	受贈点数	受託点数	特別資料内訳		
				区 分	購 入	受 贈
図書	691	675	0	原稿	84	1
雑誌	423	3,108	0	書簡	26	25
CD-ROM	5	0	0	色紙・短冊	2	21
VTR・テープ	1	4	0	その他	17	84
特別資料	129	131	0	計	129	131
レプリカ	2	0	0			
計	1,251	3,918	0			

主な購入特別資料一覧

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態	数 量
色紙	吉田一穂	吉田一穂自筆句書	扁額	1
写真	船山 馨	西創成尋常高等小学校卒業記念	写真	1
パンフレット	本庄陸男	「石狩川」 新協劇団	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「群盗」 京都新劇団懇話会	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「織匠」 新演劇人協会	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「ホオゼ(腰巻)」 新生劇協会	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「日本の気象」 劇団民芸	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「林檎園日記」 東宝株式会社	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「天佑丸」 大阪協同劇団	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「天佑丸」 劇団民芸	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「火山灰地」 テアトロ社	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	「火山灰地」 有楽座	パンフレット	1
パンフレット	久保 栄	パンフレット大阪協同劇団	パンフレット	1
版画	猪狩満直	農婦	和紙	1
原稿	渡辺 茂	「村に残る友への便り」	原稿用紙	3
原稿	葛西暢吉	差押	原稿用紙	2
原稿	葛西暢吉	お天気のおえ日	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	姉に送る手紙	原稿用紙	3
原稿	真壁 仁	解放された葛西暢吉	原稿用紙	2
版画	猪狩満直	馬	和紙	1
原稿	猪狩満直	或る会合の後に	罫紙	6
原稿	更科源蔵	一着の外套だ	原稿	1
原稿	更科源蔵	編集後記	原稿	1
原稿	竹内てるよ	漁村にて	原稿用紙	3
原稿	真壁 仁	娘達の話	原稿用紙	1
原稿	猪狩満直	炭坑長屋物語	原稿用紙	9
原稿	真壁 仁	雨の中の見知らぬ少女に	原稿用紙	2
原稿	葛西暢吉	おい貧乏人仲間	罫紙	3
原稿	渡辺 茂	再び小さい弟に寄せて	原稿用紙	3
原稿	猪狩満直	馬市の話	原稿用紙	3
原稿	渡辺 茂	君に送る詩	原稿用紙	2
原稿	葛西暢吉	叩き大工の謳歌	原稿用紙	2
原稿	猪狩満直	抗弁	原稿用紙	5
原稿	更科源蔵	編集後記	原稿用紙	4
原稿	更科源蔵	編集後記	原稿用紙	1
原稿	葛西暢吉	叩き大工の詩 いノ1,2	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	著作	便箋	1
版画	猪狩満直	坊主になりし自画像	和紙	1
原稿	葛西暢吉	叩き大工の詩 ろノ一、にノ二	原稿用紙	2
原稿	渡辺 茂	日高山道の友に	原稿用紙	3
原稿	真壁 仁	目覚メ	原稿用紙	2
原稿	坂本七郎	リアル	原稿用紙	1
原稿	坂本七郎	阿寒よ燃えろ	原稿用紙	5

種別	作家名	資料名	形態	数量
原稿	渡辺 茂	僕たちへの断片的覚帳	原稿用紙	4
原稿	竹内てるよ	無名の人々	洋紙	1
原稿	猪狩満直	無題詩	原稿用紙	1
原稿	猪狩満直	覚え書き詩一つ	原稿用紙	1
原稿	猪狩満直	働きつつある失業者	原稿用紙	3
原稿	更科源蔵	木立	原稿用紙	1
原稿	更科源蔵	オーイ	原稿用紙	1
原稿	更科源蔵	代用教員の詩	原稿用紙	1
原稿	猪狩満直	村の話(一)	ノート切れ	2
原稿	中島葉那子	どん底の詩	原稿用紙	4
原稿	葛西暢吉	叩き大工の詩ほノ一、そノ二、にノ四	原稿用紙	2
原稿	猪狩満直	敵は本能寺にありー再び高山君へ	便箋	11
原稿	真壁 仁	古譚よ燃えろ	原稿用紙	6
原稿	渡辺 茂	がまん	原稿用紙	2
原稿	猪狩満直	敵は本能寺にあり	原稿用紙	3
原稿	猪狩満直	アニマル	便箋	4
原稿	猪狩満直	嵐の日の詩	便箋	4
原稿	岡崎一男	町の祭礼にて	原稿用紙	1
原稿	猪狩満直	後記	和紙	1
原稿	渡辺 茂	夜(1-6)	原稿用紙	8
原稿	猪狩満直	窓(一)	原稿用紙	3
原稿	中西悟堂	真壁仁君の『街の百姓』に寄せる	原稿用紙	7
原稿	土田樞夫	養豚手帳	原稿用紙	8
原稿	更科源蔵	カラス	原稿用紙	4
原稿	更科源蔵	十一月の日記断片	原稿用紙	4
原稿	更科源蔵	後記	原稿用紙	1
原稿	坂本七郎	鐵屑集	原稿用紙	6
原稿	高田博厚	「北緯五十度」「犀」の諸兄	原稿用紙	10
原稿	真壁 仁	蔵王の吹雪	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	門づけをしない彼	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	秋雨(花嫁の詩・三)	原稿用紙	2
原稿	渡辺 茂	旅の歌	原稿用紙	8
原稿	茂木 幹	コタン有情	原稿用紙	6
原稿	松田利勝	炭で書いた自画像(二)	原稿用紙	4
原稿	松田利勝	炭で書いた自画像(三)	原稿用紙	3
原稿	猪狩満直	花屋と私	原稿用紙	9
原稿	真壁 仁	復活号を読んで	原稿用紙	4
原稿	猪狩満直	手紙	原稿用紙	2
原稿	更科源蔵	後記	原稿用紙	2
原稿	坂本七郎	第六夕暮れの詩	原稿用紙	4
原稿	末繁博一	四邊	原稿用紙	1
原稿	真壁 仁	野良(同題ノ三)	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	人間事	原稿用紙	5
原稿	加藤愛	手紙 更科源蔵 宛	原稿用紙	6
原稿	更科源蔵	穴	原稿用紙	1
原稿	更科源蔵	隣	原稿用紙	1
原稿	杉山市五郎	雨催ひ	原稿用紙	2
原稿	中西悟堂	クルミのおもちゃ	原稿用紙	3
原稿	更科源蔵	後記	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	夜道を歩きながら	原稿用紙	3
原稿	真壁 仁	手紙 茂木幹宛	原稿用紙	2
原稿	更科源蔵	肉牛群	原稿用紙	2
原稿	真壁 仁	参太の話	原稿用紙	1
原稿	更科源蔵	北緯五十度原稿入封筒	封筒	1
原稿	入封筒	『人間の復活』絵表紙原画	和紙	1
原稿	島木健作	島木健作書簡 佐藤 績宛	原稿用紙	1
原稿	島木健作	東京夜景	色紙	1
原稿	小熊秀雄	高村光太郎書簡 更科源蔵宛	官製葉書	1
原稿	高村光太郎	森田たま書簡 岡田耕三宛	巻紙	13
原稿	森田たま	小林多喜二書簡 雨宮庸蔵宛	便箋	1
原稿	小林多喜二	去年の雪	原稿用紙	15
原稿	小田宗治	吉田一穂書簡 更科源蔵宛	官製葉書	4
原稿	吉田一穂	吉田一穂書簡 更科源蔵宛	原稿用紙	6通
原稿	吉田一穂	故里の顔	原稿用紙	6
原稿	小林多喜二	戸隠の絵本	原稿用紙	1
原稿	萩原朔太郎	逆流	原稿用紙	40
原稿	本庄陸男			

平成10年度企画展 「吉田一穂とその時代」 出品目録

墨書

吉田一穂墨書 「半眼微笑」
 吉田一穂墨書 「地に沙鉄あり不断の泉湧く……」
 吉田一穂墨書 「独脱無依」
 吉田一穂墨書 「落葉絶運……」
 吉田一穂墨書 「月かけおいて来るものに……」
 吉田一穂墨書 「未知から白鳥は来る……」
 吉田一穂墨書 「白林虚籟」
 吉田一穂墨書 「ふるさとは波にうたるる月夜かな……」
 吉田一穂墨書 「鯨」
 吉田一穂墨書 「峡灣に漕ぐ雪解の水。候鳥に手をあげる……」
 吉田一穂墨書 「鳥跡汀拾流木……」
 吉田一穂墨書 「月白し砧むとやむ雉の声」
 吉田一穂墨書 「春風馬上益」
 吉田一穂墨書 「鞆ごととおくちかくに波の音……」
 吉田一穂墨書 「亜細亜紀」
 吉田一穂墨書 「月天心乙女菩薩となりにけり」
 吉田一穂墨書 「種の血 族の夢……」
 吉田一穂墨書 「時空の罫に雷砕ける……」
 佐伯郁郎墨書 「花の相」
 久松真一墨書 「世に背き……」

墨画

吉田一穂 「半眼微笑」

色紙

吉田一穂自筆色紙 「望郷珠の如し」
 吉田一穂自筆色紙 「半眼微笑」
 吉田一穂自筆色紙 「濤の音こもりてあらし松原に……」
 吉田一穂自筆色紙 「一穂寒燈」
 吉田一穂自筆色紙 「杖にしまた夢めぐる朝夕の……」
 高橋新吉自筆色紙 「るすといえここにはたれも……」

短冊

吉田一穂自筆短冊 「半眼微笑」
 吉田一穂自筆短冊 「月天心乙女菩薩となりにけり」
 吉田一穂自筆短冊 「一穂寒燈」
 吉田一穂自筆短冊 「白林虚籟」
 吉田一穂自筆短冊 「杖にしまた夢めぐる朝夕の……」
 吉田一穂自筆短冊 「濤の音こもりてあらし松原に……」
 吉田一穂自筆短冊 「崖の青の淀みに綱うてばみなかに……」
 吉田一穂自筆短冊 「よべの雨うらの芦間に水嵩のまして……」
 吉田一穂自筆短冊 「ふるさとは波にうたるる月夜かな」

書簡

吉田一穂書簡 及川一郎宛 昭和28年7月1日付
 吉田一穂書簡 及川春枝宛 昭和44年4月5日付
 吉田一穂書簡 今井富士雄宛 昭和10年月日不明

葉書

吉田一穂葉書 及川春枝宛 昭和28年8月17日付
 吉田一穂葉書 及川一郎宛 昭和28年6月9日付
 吉田一穂葉書 岡崎清一郎宛 昭和12年4月22日付
 吉田一穂葉書 岡崎清一郎宛 発送年月日不明
 吉田一穂葉書 岡崎清一郎宛 発送年月日不明
 吉田一穂葉書 添田邦裕宛 昭和32年10月31日付
 吉田一穂葉書 添田邦裕宛 昭和28年6月9日付
 吉田一穂葉書 添田邦裕宛 昭和26年12月24日付
 吉田一穂葉書 添田邦裕宛 昭和32年10月31日付
 吉田一穂葉書 添田邦裕宛 昭和27年7月8日付
 吉田一穂葉書 鈴見健次郎宛 昭和24年4月3日付
 北川冬彦葉書 吉田一穂宛 昭和24年10月22日
 蒲地歡一葉書 吉田一穂宛 昭和28年5月28日付

自発原稿

吉田一穂自筆原稿 「古代緑地」
 吉田一穂自筆原稿 「白鳥古丹」
 吉田一穂自筆原稿 「道産子」
 吉田一穂自筆原稿 「非存」
 吉田一穂自筆原稿 「影」
 吉田一穂自筆原稿 「地獄の骰子」
 吉田一穂自筆原稿 「微塵像」
 吉田一穂自筆原稿 「日本語の形態と民族の形成……」
 吉田一穂自筆原稿 「稗子傳」

吉田一穂自筆原稿 「日本四季辞譜図典」
 吉田一穂の絶筆原稿
 吉田一穂自筆原稿 「黒潮回帰・序文」
 吉田一穂自筆原稿 「おべりすく」2号掲載分
 吉田一穂自筆原稿 「く無の鍾」I
 横光利一自筆原稿 「七階の運動」
 金子光晴自筆原稿 「無法」
 佐伯郁郎自筆原稿 「東北詩人風土記」
 佐藤一英自筆原稿 「悲しき鈴」
 佐藤一英自筆原稿 「二十世紀の詩の正座」
 更科源蔵自筆原稿 「詩人の童話」
 渡辺茂自筆原稿 「泥炭地」

吉田一穂著書

吉田一穂著 『稗子傳』 1939年(昭和11)ボン書店
 吉田一穂著 『黒潮回帰』 1941年(昭和16)一路書宛
 吉田一穂著 『吉田一穂詩集』 1952年(昭和27)創元社
 吉田一穂著 『故園の書』 1930年(昭和5)厚生閣書店
 吉田一穂著 『海の聖母』 1973年(昭和48)渡辺書店
 吉田一穂著 『古代緑地』 1958年(昭和33)木曜書房
 吉田一穂著 『冷明集』 1976年(昭和51)コーベックス
 吉田一穂著 『吉田一穂試論集』 1948年(昭和23)

一路書宛

吉田一穂著 『桃花村』 1972年(昭和48)弥生書房
 吉田一穂著 『羅甸薔薇』 1950年(昭和25)山雅房
 吉田一穂著絵本 『ひばりはそらに』 1978年(昭和53)

フレーベル館

吉田一穂著絵本 『ウシカフムスメ』

G H Q 検閲セクション提出校正本

吉田一穂著 『未来者』 1948年(昭和23)青磁社
 吉田一穂著 『極の誘い』 1948年(昭和23)一路書店
 吉田一穂著 『うしかひむすめ』 1947年(昭和22)

霞ヶ関書房

吉田一穂校訂本など

吉田一穂著 『未来者』 編集用原稿本
 吉田一穂編集用束見本 『黒潮回帰』 改稿用
 吉田一穂 「桃花村」 草稿ノート
 吉田一穂著 『ヒバリハソラニ』 完成原本1941年(昭和16)

帝国教育会出版部

吉田一穂校訂本 『吉田一穂童話集』

吉田一穂校訂本 『吉田一穂詩集』

吉田一穂校訂本 『黒潮回帰』

吉田一穂校訂本 『未来者』

吉田一穂校訂本 『ぎんかのさかな』

吉田一穂校訂本 『かしの木とことり』

吉田一穂校訂本 『古代緑地』

吉田一穂校訂本 『屋上の花』

吉田一穂著校訂本 『羅甸薔薇』

関連文学者著書

横光利一著 『機械』 1931年(昭和6)白水社
 横光利一著 『秘色』 1940年(昭和15)新聲社
 日夏耿之介著 『日本近代詩史論』 1949年(昭和24)

角川書店

日夏耿之介著 『転身の頌』 1917年(大正6)

光風館書店

金子光晴著 『鬼の児の唄』 1949年(昭和24)

十字屋書店

福士幸次郎著 『原日本考』 1942年(昭和17)白馬書房

中山義秀著 『いしぶみ』 1947年(昭和22)日産書房

中山義秀著 『故里の土』 1963年(昭和38)新潮社

吉田秀和著 『ソロモンの歌』 1970年(昭和45)

河出書房新社

吉田秀和著 『文学のとき』 1994年(平成6)白水社

春山行夫著 『詩人の手帖』 1955年(昭和30)河出書房

三木露風著 『廢園』 1909年(明治42)光華書房

三木露風著 『修道院生活』 1926年(大正15)新潮社

高橋新吉著 『高橋新吉詩集』 1953年(昭和27)創元社

佐藤一英著 『詩集みいくさの日』 1944年(昭和19)

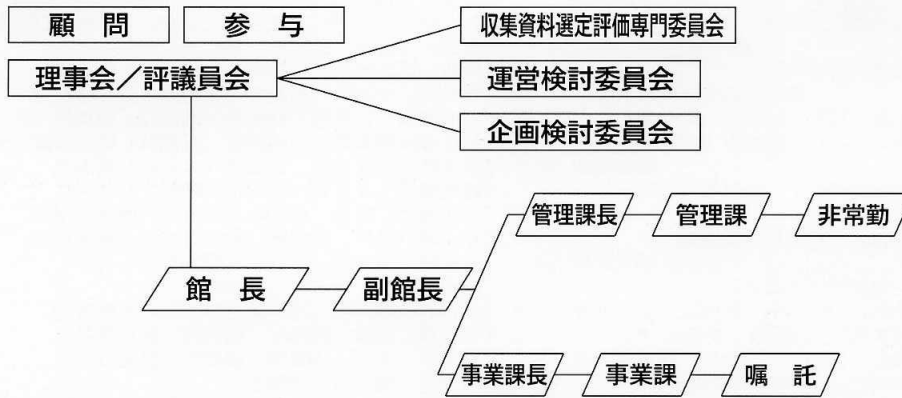
湯川弘文社

北原白秋著 『北原白秋詩集』 1947年(昭和22) 鎌倉書房
小山一郎著 『アスーリヤ』 1986年(昭和61) 反世界社
北川冬彦著 『馬と風景』 1952年(昭和27) 時間社
安東次男著 『安東次男詩集』 1952年(昭和27) 三一書房
添田邦裕著 『詩集 地の骨』 1993年(平成5) 四九一アヴェン発行
水見悠々子著 『ふるさとの吉田一穂』 復刻版1998年(平成10) 築地書館
今官一著 『詩人・福士幸次郎』 1957年(昭和32) 井尻正二著 『吉田一穂の世界』 1980年(昭和50) 桃源社
吉田八岑著 『西洋 暗黒史外伝』 1971年(昭和46) 角川書店
吉田八岑著 『Vampires』 1998年(平成10) 人類文化社
西条八十著 『砂金』 1919年(大正8) 井尻正二著 『独創の方法』 1976年(昭和51) 玉川選書
吉田美和子著 『桃花村まで』 1990年(平成2) 三月社
真壁仁著 『吉田一穂論』 1976年(昭和51) 深夜叢書社
秋山澄夫訳 『マラルメ詩集』 1955年(昭和30) 角川書店
渡辺茂著 『詩集 泥炭地層』 1955年(昭和30) 楡書房
蒲池欽一著 『石のいのち』 1953年(昭和28) 森北出版株式會社
今井鴻象著 『老いたる愛の詩』 1950年(昭和25) 千代田書院
更科源藏著 『無名』 1952年(昭和27) さるん書房
桜井勝美著 『ボタンについて』 1953年(昭和28) 時間社
内山義郎著 『沙上の人』 1959年(昭和34) 星野水裏著 『浜千鳥』 1912年(大正元) 真貝亮子著 『白鳥古丹—詩人吉田一穂のふるさと—』 1991年(平成3) 糸市豆本の會
浦上帰一著 『粉砕都市』 1951年(昭和26) 關係圖書
『日本現代詩選集』 1993年 米田ガーランド出版社
『日本現代代表詩選』 1997年 韓国創作と批評社
『吉田一穂試論集』 1948年(昭和23) 一路書房
『マラルメ研究』 3号 1933年(昭和8) アトリエ社
『墨海 久松真一の書』 久松真一の書刊行會編 1982年(昭和57) 燈影舎
『吉田一穂大系』 全三卷 1970年(昭和45) 仮面社
『定本 吉田一穂全集』 全3巻別巻1 1979年(昭和54) 小澤書店
『新詩論』 1号 1932年(昭和7) アトリエ社
『現代詩新講』 1951年(昭和26) 宝文館
『現代詩代表選集』 1号 1950年(昭和25) 小出書店
『現代詩講座』 2号 1950年(昭和25) 創元社
『詩と詩論』 5号 1931年(昭和6) 厚生閣書店
『日本詩集』 1919年(大正8) 新潮社
『佐藤一英歌曲集』 1991年(平成3) 佐藤一英「歌曲集」刊行會
『定本・吉田一穂詩集』 1976年(昭和51) 神戸柯書局
『児童文学』 1号 1931年(昭和6) 文教書院 復刻版
絵本
絵本『ハマノコタチ』 1942年(昭和17) 金井信生堂
絵本『ムラノナカヨシマタアシタ』 1941年(昭和16) 金井信生堂
絵本『ハナサキミノル』 1942年(昭和17) 金井信生堂
絵本『ハマノコタチ』 1942年(昭和17) 金井信生堂
絵本『サルトカニ』 1942年(昭和17) 金井信生堂
絵本『イッスンボフシ』 1942年(昭和17) 金井信生堂
雑誌
「日本未来派」 55号 1953年(昭和28) 日本未来派社
「詩学」 5月号 1973年(昭和48) 詩学社
「週刊朝日」 1973年(昭和48) 3月16日号
「現代詩手帖」 4月号 1973年(昭和48) 思潮社
「北方文芸」 9月号 1973年(昭和48) 北方文芸刊行會發行

「日本詩壇」 1月号 1934年(昭和9) 日本詩壇發行所
「日本詩人」 8月号 1926年(大正15) 新潮社
「詩神」 4月号 1951年(昭和6) 詩神社
「文藝」 2月号 1963年(昭和38) 河出書房新社
「文学散歩」 7月号 1961年(昭和36) 雪華社
「反響」 1936年(昭和11) 反響社發行
「おべりすく」 1号 1973年(昭和48) おべりすく發行所
「聖餐」 4月号 1935年(昭和10) 聖餐發行所
「佐藤一英追悼号」 1981年(昭和56) 韻律詩社
「現代詩」 8月号 1948年(昭和23) 詩と詩人社
「日本詩人」 11月号 1923年(大正12) 新潮社
「福士幸次郎素描」 1956年(昭和31) 尾張の福士会
「日本詩人」 2月号 1922年(大正11) 新潮社
「近代風景」 4月号 1937年(昭和2) アルス
「中山義秀」 図録 1990年(平成2) 鎌倉文学館
「至上律」 11号 1952年(昭和27) 至上律發行所
「令女界」 新年号 1947年(昭和22) 「骰子一擲」 1966年(昭和41)
「反世界」 創刊号 1967年(昭和42) 木曜書房
「反世界」 6号 1982年(昭和57) 反世界社
「反世界」 8号 1987年(昭和62) 反世界社
「反世界」 復刊号 1982年
「九十年の歩み」 1973年(昭和48) 記念行事協賛會
「ユリイカ」 1987年(昭和62) 青土社
「キングダーブック」 1953年(昭和28) フレーベル館
「国語国文研究」 第75号 1986年(昭和61) 北海道大学国文学會
「詩神」 3月号 1927年(昭和2) 詩神社
「途上に現われるもの」 11号 1924年(大正13) 途上社
「文党」 2月号 1926年(大正15) 金星堂
「日本詩人」 8月号 1926年(大正15) 新潮社
「黒潮時代」 1号 1930年(昭和5) 黒潮時代社
「詩人時代」 6月号 1932年(昭和7) 詩人時代社
「楽園」 4月号 1922年(大正11) 楽園詩社
「自然児」 1号 1926年(大正15) 自然児詩社
「早稲田大学中退者名簿」 1972年(昭和47) 早稲田大学中退者同窓會
「表象」 創刊号 1958年(昭和33) 日本文学美術協會
「魔法」 6号 1949年(昭和24) 原地社
「Critic」 1号 1951年(昭和26) 月曜書房
「羅甸區」 18号 1948年(昭和23) 兄弟書房
「国土と教育」 24号 1974年(昭和48) 築地書館
「道路建設」 1月号 1967年(昭和42) 日本道路建築業協會
「草津公論」 (昭和33年10月1日) 草津公論
吉田一穂遺品
茶壺 燭台 座卓 墨 筆 眼鏡 パイプ 時計 洛款
文鎮 ルーベ 定規 手彫表札など
その他
「かみしばい まんが ニュース」 1号 1948年(昭和23) 6月25日
「かみしばい まんが ニュース」 2号 1948年(昭和23) 7月15日
「かみしばい まんが ニュース」 3号 1948年(昭和23) 8月5日
吉田一穂自筆メモ記載名刺
未発表の童話「あしたのはな」の表紙と挿入絵(原画)
三浦まみ(現代の童話画家)による、吉田一穂絵本「ひばりはそらに」の挿絵
斉藤佐知(現代の童話画家)による吉田一穂絵本「一つぶのむぎ」の挿絵
「鎮魂歌」(作詞・吉田一穂・作曲・細谷一郎) 楽譜
「海鳥」(作詞・吉田一穂・作曲・松永通温) 楽譜
文芸レコード(日本現代詩大系)
ダレス長官歓迎パンフレット
初山滋の画伯のペン画(原画)
ドン・コザック合唱団来日記念パンフレット 1955年(昭和30)
尾西市立三条小学校校歌譜面
古平高等学校校歌譜面
東京都立千歳高等学校校歌譜面
初山滋ペン画原版

■ 組織及び役職員 ■

■ 組織機構図



■ 財団法人北海道文学館役員等の状況

〈理事・監事〉

役職名	氏名	就任年月日
理事長	澤田 誠一	H10. 4. 1
副理事長	河邨文一郎	H10. 4. 1
副理事長	園田 喜武	H10. 4. 1
副理事長	木原 武男	H10. 4. 1
副理事長	小杉 捷七	H10. 4. 1
専務理事	西村 信	H10. 4. 1
常務理事	池田 忠之	H10. 4. 1
理事	朝倉 賢	H10. 4. 1
理事	小笠原 克	H10. 4. 1
理事	神谷 忠孝	H10. 4. 1
理事	木村 敏男	H10. 4. 1
理事	工藤 欣彌	H10. 4. 1
理事	島 安	H10. 4. 1
理事	高橋 良雄	H10. 4. 1
理事	高島 二郎	H10. 4. 1
理事	田村 哲三	H10. 4. 1
理事	辻脇 啓一	H10. 4. 1
理事	永井 浩	H10. 4. 1
理事	村井 宏	H10. 4. 1
理事	山名 康郎	H10. 4. 1
監事	斎藤 大雄	H10. 4. 1
監事	平中 忠信	H10. 4. 1

〈顧問〉

伊藤 義郎 中山 周三 原田 康子 坂野上 明
堀 寛 三浦 綾子 堂垣内尚弘 八木 義徳

〈参与〉

上西 晴治(作家) 岡澤 康司(俳人) 重森 直樹(作家)
高山 亮二(文学研究) 長野 京子(児童文学) 平山廣(文学研究)
八森虎太郎(詩人)

〈評議員〉

氏名	就任年月日	氏名	就任年月日	氏名	就任年月日
東 延江	H10. 4. 1	斎 藤 一 郎	H10. 4. 1	富 田 正 一	H10. 4. 1
新 井 章 夫	H10. 4. 1	齊 藤 征 義	H10. 4. 1	鳥 居 省 三	H10. 4. 1
伊 東 廉	H10. 4. 1	桜 井 健 治	H10. 4. 1	中 山 昭 彦	H10. 4. 1
大 川 佐 雅 子	H10. 4. 1	佐 藤 庫 之 介	H10. 4. 1	永 田 富 智	H10. 4. 1
大 澤 哲 夫	H10. 4. 1	塩 見 一 釜	H10. 4. 1	新 妻 博	H10. 4. 1
小 野 規 矩 夫	H10. 4. 1	柴 村 紀 代	H10. 4. 1	萩 原 貢	H10. 4. 1
小 笠 井 嗣 夫	H10. 4. 1	菅 原 政 雄	H10. 4. 1	原 子 修	H10. 4. 1
笠 原 肇	H10. 4. 1	杉 野 一 博	H10. 4. 1	樋 口 游 魚	H10. 4. 1
加 藤 多 一	H10. 4. 1	鈴 木 光 彦	H10. 4. 1	菱 川 善 夫	H10. 4. 1
金 丸 義 昭	H10. 4. 1	鈴 木 八 駿 郎	H10. 4. 1	藤 本 英 夫	H10. 4. 1
金 箱 戈 止 夫	H10. 4. 1	高 野 斗 志 美	H10. 4. 1	前 川 公 美 夫	H10. 4. 1
河 草 之 介	H10. 4. 1	高 橋 和 光	H10. 4. 1	光 城 健 悦	H10. 4. 1
川 辺 為 三	H10. 4. 1	高 橋 康 雄	H10. 4. 1	南 利 一	H10. 4. 1
菊 地 慶 一	H10. 4. 1	武 井 静 夫	H10. 4. 1	宮 西 頼 母	H10. 4. 1
北 光 星	H10. 4. 1	立 花 峰 夫	H10. 4. 1	藪 禎 子	H10. 4. 1
木 村 真 佐 幸	H10. 4. 1	田 中 和 夫	H10. 4. 1	山 下 和 章	H10. 4. 1
工 藤 正 廣	H10. 4. 1	田 中 厚 一	H10. 4. 1	山 本 丞	H10. 4. 1
島 倉 齊	H10. 4. 1	谷 暎 子	H10. 4. 1	横 井 み づ る	H10. 4. 1
後 藤 軒 太 郎	H10. 4. 1	谷 口 亜 岐 夫	H10. 4. 1	吉 田 秋 陽	H10. 4. 1
小 林 孝 虎	H10. 4. 1	千 葉 宣 一	H10. 4. 1	米 谷 祐 司	H10. 4. 1
小 山 博	H10. 4. 1	藤 堂 志 津 子	H10. 4. 1	鷺 谷 峰 雄	H10. 4. 1
西 條 正 人	H10. 4. 1	時 田 則 雄	H10. 4. 1		

(注) 辞退 藤 本 英 夫 H10. 6. 15 宮 西 頼 母 H10. 12. 22
死去 横 井 み づ る H10. 9. 23

<収集資料選定評価専門委員会>

氏 名	所 属 等
神 谷 忠 孝	理 事 (日本近代文学)
小笠原 克	” (日本近代文学)
木 村 敏 男	” (俳 句)
田 村 哲 三	” (短 歌)
永 井 浩	” (詩)

<運営検討委員会>

氏 名	所 属 等
河 邨 文一郎	副理事長 (詩)
朝 倉 賢	理事 (小説、シナリオ)
工 藤 欣 彌	” (小 説)
西 條 正 人	評議員 (会 社 役 員)
谷 口 明 雄	” (俳 句)

<企画検討委員会>

氏 名	所 属 等
園 田 喜 武	副理事長 (俳 句)
小笠原 克	理 事 (日本近代文学)
神 谷 忠 孝	” (日本近代文学)
木 村 敏 男	” (俳 句)
田 村 哲 三	” (短 歌)
永 井 浩	” (詩)

氏 名	所 属 等
加 藤 多 一	評議員 (児童文学)
工 藤 正 廣	” (ロシア文学)
柴 村 紀 代	” (児童文学)
原 子 修	” (詩)
藤 本 英 夫	” (考 古 学)

■職員名簿

職 名	氏 名
館長(財団副理事長)	小 杉 捷 七
副館長(財団専務理事)	西 村 信
副館長(財団常務理事)	池 田 忠 之
管 理 課 長	小 池 吉 明
主 査	桑 原 拓
主 任	長 居 成 好
事 業 課 長	平 原 一 良
学 芸 員	青 柳 文 吉
主 任	田 澤 義 公
司 書	小 川 靖 子
主 任	宮 坂 頌 子
主 任	岡 本 茂 子
主 任	丹伊田 範 子

職 名	氏 名
主 事	米 澤 真 澄
主 事	馬 淵 直 子
主 事	田 中 順 美
主 事	成 田 麻 衣 子
主 事	僧 都 一 根

■ 諸会議・運営日誌 ■

- H10. 4. 1 (水) 平成10年度道立文学館管理委託契約締結
- 〃 4. 25 (土) 特別企画展「北海道の短歌」開会 (5月31日まで)
第1回運営検討委員会、同運営検討委員会・企画検討委員会合同会議開催
平成9年度事業報告、収支決算、評議委員改選承認、
- 〃 5. 21 (木) 第2回運営検討委員会・企画検討委員会合同会議開催
- 〃 5. 23 (土) 文芸講演会「アララギの歌人たちと北海道」(宮地伸一)
- 〃 5. 30 (土) 平成10年度第1回理事会、同評議委員会開催
- 〃 6. 20 (土) 第1回企画検討委員会開催
- 〃 6. 21 (日) 映像鑑賞のつどい「氷点」
- 〃 6. 28 (日) 映像鑑賞のつどい「幻の光」
- 〃 6. 30 (火) 広報誌「サンクンガーデン」第6号発行
- 〃 7. 1 (水) 北海道文学館第48号発行
- 〃 7. 4 (土) 文芸セミナー「俳句で考えたこと」(辻協系一)
- 〃 7. 25 (土) 夏休みファミリー文学館「エッチングでさし絵づくり」開会 (7月30日まで 5日間)
- 〃 8. 8 (土) 特別企画展「有島武郎とヨーロッパ・ティルダ、まだ僕のことを覚えていますかー」開会 (10月11日まで)
文芸講演会「スイスにおける日本文化の受容史」(ルネ・シュペヒト)
- 〃 8. 9 (日) シンポジウム「有島武郎とスイス」(R・シュペヒト、神谷忠孝、高山亮二、ハイコ・ナログ、平原一良、有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 8. 15 (土) 縄文詩劇の会、創造集団ノール主催「ポエムコンサートー詩と音楽と演劇のつどいー」
- 〃 8. 22 (土) 文芸セミナー「有島武郎と札幌の家」(前川公美夫)
- 〃 8. 23 (日) 作品鑑賞のつどい第1回「『星座』を読む」(藪 禎子 有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 9. 5 (土) 講座第1回「有島武郎のアメリカ」(栗田廣美 有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 9. 11 (金) 音楽と朗読の夕べ「有島武郎が聴いたティルダの歌声」(有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 9. 12 (土) 文芸講演会「有島武郎とわたし」(永畑道子)
文芸おたのしみバザール(古書市)実施(13日まで)

- 〃 9. 26 (土) 講座第2回「新渡戸稲造・内村鑑三と有島武郎」(高山亮二 有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 9. 27 (日) 作品鑑賞のつどい第2回『『カインの末裔』を読む』(工藤正広 有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 10. 3 (土) 文学館フォーラム「有島文学の現代性」(神谷忠孝 井上理恵 中山昭彦 山田俊治 有島武郎生誕100年記念事業として実施)
- 〃 10. 24 (土) 文芸セミナー「風土に育つ文学」(鳥居省三)
- 〃 11. 7 (土) 映像鑑賞のつどい「華の乱」
第2回企画検討委員会開催
- 〃 11. 14 (土) 映像鑑賞のつどい「ルイ・リュミエール作品集」
フィルムレクチャー「映像創生期とアヴァンギャルド映画」(中島洋)
- 〃 11. 16 (月) 資料薫蒸(19日まで)
- 〃 11. 21 (土) ロルカの夕べ実行委員会他主催 「G・ロルカの夕べ」
- 〃 12. 15 (火) 北海道文学館報第49号発行
- 〃 12. 19 (土) 第3回運営検討委員会・企画検討委員会合同会議開催
- H11. 1. 9 (土) 母と子の文学のつどい「大井戸百合子・銅版画による絵本原画とさし絵展」(1月17日まで)
作品解説とワークショップ「絵本を読む・絵本描く」(10日との2日間)
ファミリー文学館作品展「わたしの銅版画さくひん！」(1月17日まで)
- 〃 2. 6 (土) 企画展「吉田一穂とその時代—現代詩の極北をめざす—」開会(3月20日まで)
特別講演会「白鳥古丹と吉田一穂」(添田邦裕)
- 〃 2. 27 (土) 第3回企画検討委員会開催、第4回運営検討委員会・企画検討委員会合同会議開催
- 〃 3. 5 (金) 第2回運営検討委員会開催
- 〃 3. 13 (土) 文芸セミナー「吉田一穂の遺したもの」(平原一良)
- 〃 3. 20 (土) 平成10年度第2回理事会開催
- 〃 3. 27 (土) 平成10年度第2回評議員会開催
平成11年度事業計画、収支予算議決。賛助会員への会員証発行と寄附行為の規定の一部改正について了承
- 〃 3. 31 (水) 広報誌サンクンガーデン第7号発行

<付録>

北海道立文学館利用規則

北海道教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第14条第1項並びに第23条第1号及び第12号の規定に基づき、この教育委員会規則をここに制定する。

（趣旨）

第1条 北海道立文学館の利用については、法令等に定めるもののほか、この教育委員会規則の定めるところによる。

（文学館の目的）

第1条の2 北海道立文学館（以下「文学館」という。）は、文学に関する書籍、原稿、書簡、文献、写真その他の資料及び文学者の遺品等（以下「文学資料」という。）を収集し、保存し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする。

（文学館の事業）

第1条の3 文学館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

- 1 文学資料を収集し、保管し、及び展示すること。
- 2 文学館が収集した文学資料を閲覧に供すること。
- 3 文学に関する展覧会、講演会、講座、映画鑑賞会その他の催し（以下「文学に関する催し」という。）を開催し、及び他の行うそれらの催しに協力すること。
- 4 一般公衆に対して、文学資料の利用に関し、必要な説明、助言等を行うこと。
- 5 特別展示室又は講堂（以下「特別展示室等」という。）を文学に関する催しの利用に供すること。
- 6 文学及び文学資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。
- 7 文学資料の保管、展示等に関する技術的研究を行うこと。
- 8 文学に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書を作成し、及び配布すること。
- 9 他の文学館、図書館、美術館、博物館、研究機関等と緊密に連携し、及び協力し、刊行物及び情報の交換、文学資料の相互賃借等を行うこと。
- 10 地域における学校、図書館、公民館等の教育又は文化に関する諸施設が行う文学に関する活動を援助すること。
- 11 その他文学館の目的を達成するために必要な事業

（開館時間）

第2条 文学館の開館時間は、午前10時から午後5時までとする。

- 2 文学館の管理運営上特別の必要があるとき又は非常変災その他急迫の事情があるときは、教育長は、臨時に、前項の開館時間を変更することができる。
- 3 前項の規定により開館時間を変更したときは、教育長は、その旨を文学館に掲示しなければならない。

（休館日）

第3条 文学館は、次に掲げる日には休館する。

- 1 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日
- 2 月曜日
- 3 1月2日、同月3日及び12月29日から同月31日まで
- 2 文学館の管理運営上特別の必要があるときは、教育長は、前項に規定する休館日に開館することができる。

（臨時休館）

第4条 前条第1項に定めるもののほか、文学館の管理運営上特別の必要があるとき又は非常変災その他急迫の事情があるときは、教育長は、臨時に、休館することができる。

2 第2条第3項の規定は、前項の規定により臨時に休館する場合について準用する。

(入館の制限)

第5条 他人に迷惑を及ぼし、又はそのおそれがある者に対しては、教育長は、入館を断ることができる。

(入館者の遵守事項)

第6条 入館者は、文学館の利用につき、この規則及び教育長の指示に従うほか、特に次に掲げる事項を遵守しなければならない。

1 建物、附属設備又は文学館資料(文学館が収集し、保管し、又は展示する資料をいう。以下同じ。)を汚し、若しくは損傷し、又はそれらのおそれのある行為をしないこと。

2 他人に迷惑を及ぼし、又はそのおそれのある行為をしないこと。

3 指定の場所以外で飲食し、又は喫煙しないこと。

2 入館者が前項の規定に違反し、かつ、文学館の管理運営上支障があると認めるときは、教育長は、当該入館者を退館させることができる。

(入館の細目)

第7条 前2条に定めるもののほか、入館に関し必要な事項は、教育長が定める。

(観覧料の免除)

第8条 次に掲げる者が文学館における常設展示又は展覧会(特別企画によるものの展覧会を除く。)を観覧する場合は、その観覧料を免除する。

1 小学校の児童並びに中学校及び高等学校の生徒並びにこれらに準ずる者(特別展示を除く。)

2 小学校の児童又は中学校の生徒を引率する校長又は教員

3 盲学校、聾学校及び養護学校の児童又は生徒の引率者

4 児童福祉法(昭和22年法律第164号)第7条に規定する児童福祉施設に入所し、又は通園している少年及びその引率者

5 身体障害者福祉法(昭和24年法律第283号)第15条第4項の規定による身体障害者手帳の交付を受けている者及びその引率者

6 生活保護法(昭和25年法律第144号)による生活保護を受けている者

7 児童相談所、精神薄弱者更生相談所、精神保健福祉センター若しくは障害者職業センターの長又は精神保健指定医により精神薄弱者と判定された者及びその引率者

8 精神保健福祉センターの長、精神保健指定医又は精神科を標ぼうする医師により精神障害者(精神薄弱者を除く。)と判定された者及びその引率者

9 老人福祉法(昭和38年法律第133号)第15条に規定する老人福祉施設に入所している者及びその引率者

10 65歳以上の者

11 その他教育長が前各号に準ずる者と認めるもの

2 前項の規定により観覧料の免除を受けようとする者は、同項各号に該当する者であることを証する書面を教育長に掲示しなければならない。

3 第1項に該当する場合を除き、観覧料の免除を受けようとする者は、あらかじめ観覧料免除申請書(別記第1号様式)を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。

4 教育長は、前項の規定により観覧料を免除するときは、観覧料免除書(別記第2号様式)を交付するものとする。

(特別展示室等の利用の承認)

第9条 文学に関する催しを行うため、特別展示室等を利用しようとする者は、あらかじめ、特別展示室等利用申請書(別記第3号様式)を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。

2 教育長は、前項の規定により特別展示室等の利用を承認したときは、特別展示室等利用承認書(別記第4号様式)を交付するものとする。

(特別展示室等の利用の不承認)

第10条 教育長は、前条第1項の申請が次のいずれかに該当すると認める場合は、その利用を承認しないものとする。

- 1 利用の目的が文学館の目的に沿わないとき。
- 2 文学館の秩序を乱すおそれがあるとき。
- 3 文学に関する催しの料金が1人につき、1,350円を超えるとき。
- 4 その他文学館の管理運営上支障があるとき。

2 教育長は、前項の規定により特別展示室等の利用を承認しないときは、申請者に対し、書面により、その旨を通知するものとする。

(特別展示室等の利用の承認の取消等)

第11条 教育長は、特別展示室等の利用の承認を受けた者(以下「利用者」という。)が次のいずれかに該当すると認める場合は、その承認を取り消し、又はその利用を制限し、若しくは停止することができる。

- 1 利用の申請に偽りがあったとき。
- 2 この教育委員会規則に違反したとき。
- 3 故意又は重大な過失により施設設備を破損し、又は滅失したとき。
- 4 その他文学館の管理運営上支障があるとき。

(施設設備の変更の禁止)

第12条 利用者は、特別展示室等の利用において、その施設設備に特別な設備をし、又は変更を加えてはならない。ただし、あらかじめ、教育長の承認を受けたときは、この限りでない。

(原状回復の義務)

第13条 利用者は、特別展示室等の利用を終了したときは、その利用に係る施設設備を原状に回復しなければならない。第11条の規定により利用の承認を取り消され、又は利用を制限され、若しくは停止されたときも、同じとする。

(使用料の免除)

第13条の2 特別展示室等の利用が次のいずれかに該当する場合はその使用料の免除を受けることができる。

- 1 道立文学館との共催により開催する文学に関する催しのため利用するとき。
- 2 その他教育長が必要と認めるとき。
- 2 前項の規定により使用料の免除を受けようとする者は、あらかじめ、使用料免除申請書(別記第4号様式の2)を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。
- 3 教育長は、第1項の規定により使用料を免除するときは、申請者に対し、使用料免除書(別記第4号様式の3)を交付しなければならない。
- 4 教育長は、使用料を免除しないときは、申請者に対し、書面により、その旨を通知しなければならない。

(文学館資料の閲覧)

第14条 文学館資料(文学館が他から借り受けたものを除く。第2項、第4項及び次条から第19条までの規定において同じ。)を閲覧しようとする者は、あらかじめ、文学館資料閲覧申込書(別記第5号様式)を教育

長に提出しなければならない。

- 2 前項の規定にかかわらず、保存対策上特別の取扱いを要する文学館資料（以下「特別資料」という。）を閲覧しようとする者は、あらかじめ、特別資料閲覧申請書（別記第6号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。
- 3 教育長は、前項の規定により特別資料の閲覧を承認したときは、特別資料閲覧承認書（別記第7号様式）を交付するものとする。
- 4 文学館資料は、所定の場所で閲覧しなければならない。

（閲覧の制限）

第15条 この教育委員会規則その他の規程に違反した者及び教育長の指示に従わない者に対しては、教育長は、文学館資料の閲覧を禁止することができる。

（特別利用の承認等）

第16条 文学館資料の撮影、複写又は模造（以下「特別利用」という。）を行おうとする者は、あらかじめ、特別利用申請書（別記第8号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。

- 2 教育長は、前項の規定により特別利用を承認したときは、特別利用承認書（別記第9号様式）を交付するものとする。
- 3 特別利用は、教育長の指示に従って行わなければならない。
- 4 教育長は、特別利用の承認を受けた者が前項の規定に違反したときは、その承認を取り消すことができる。

（撮影品等の刊行等の承認）

第17条 文学館資料を撮影し、複写し又は模造したもの（以下「撮影品等」という。）を刊行し、若しくは複製し、又は研究発表等に使用しようとする者は、あらかじめ、撮影品等使用申請書（別記第10号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。

- 2 教育長は、前項の規定により撮影品等の刊行等を承認したときは、撮影品等使用承認書（別記第11号様式）を交付するものとする。

（文学館資料の貸出し）

第18条 文学館資料は、次に掲げる者に対して貸出しをすることができる。

- 1 国立の博物館、博物館法（昭和26年法律第285号）第2条第1項に規定する博物館及び同法第29条の規定により文部大臣の指定した博物館に相当する施設の長
- 2 社会教育法（昭和24年法律第207号）第21条に規定する公民館の長
- 3 国立の図書館及び図書館法（昭和25年法律第118号）第2条第1項に規定する図書館の長
- 4 学校教育法（昭和22年法律第26号）第1条に規定する学校の長
- 5 その他教育長が適当と認める者

2 前項の規定により貸出しを受けようとする者は、あらかじめ、文学資料貸出申請書（別記第12号様式）を教育長に提出し、承認を受けなければならない。

3 教育長は、前2項の規定により文学館資料の貸出しを承認したときは、文学資料貸出承認書（別記第13号様式）を交付するものとする。

（貸出期間等）

第19条 文学館資料の貸出期間は、30日以内とする。

2 前項の規定にかかわらず、教育長は、特に必要と認めたときは、文学館資料の貸出期間を延長することができる。

3 教育長は、必要があるときは、貸出期間中であっても、文学館資料の返還を求めることができる。

(破損等の責任)

第20条 文学館の入館者、特別展示室等の利用者、文学館資料の閲覧者若しくは特別利用を行う者又は文学館資料の貸出しを受けた者が、その施設設備又は文学館資料を破損し、又は滅失したときは、これを原状に回復し、又はその損害を賠償しなければならない。

(補則)

第21条 この教育委員会規則の施行に関し必要な事項は、教育長が定める。

附 則

(施行期日)

この教育委員会規則は、平成7年1月4日から施行する。

附 則

この教育委員会規則は、公布の日から施行する。

(様式は省略)

平成10年度年報

HOKKAIDO MUSEUM OF LITERATURE

北海道立文学館・(財)北海道文学館

〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番4号

TEL (011) 511-7655 FAX (011) 511-3266

[印刷：中西印刷株式会社]